# フレーベルの子ども観
## ——象徴的存在の視点において——

吉　岡　正　宏

### はじめに

フレーベルは「子どもの生の最も早期の諸現象は象徴的である。」(1)と述べている。この点について，ボルノーは「早期の幼児段階の本質と同時に，幼児期への教育的影響の可能性も，象徴の概念から解明される。」(2)と断定している。この指摘は，象徴において子どもの生のすべてを理解する鍵が与えられている，とフレーベルがしばしば強調している点に立脚するものである。このようなフレーベルの叙述やボルノーの指摘から，子ども存在を象徴的存在として捉える視点において考察することによって，フレーベルの子どもに関する基本的な見解をできるだけ明らかにしたいと考える。この小論は，このような問題設定に基づき，彼の主著『人間の教育』を中心に，特に彼が重要視している乳児期における「最初の微笑」，幼児期における「遊戯」を手掛りとして検討する。

### I

フレーベルは，乳児期における子どもの「最初の微笑」の中に，本来的に人間的なものを見ている。と言うのは，微笑は，「人間の品位」を特徴付けるものであり，その点で他のすべての生物から区別されるものだからである。彼によれば，人間と同様に動物も，「身体的健康・肉体的快感」の感情をもってはいるが，動物においてこの感情は微笑として表現されることはない(3)のである。まだ言語をもちえないこの時期の子どもは，微笑を通してまず母親との最初の合一の関係に入る。なぜなら，この子どもの微笑を，彼は，「自己の能力を相手に理解させる表現であり，また自己の能力を相手によって理解されるという表現」(4)として捉えるからである。したがって，

この微笑は,「すでに意識の段階に立っている人間の精神の表現」であり,その意味で「人間の本質の高貴なる表現」[5]なのである。

このようにして,フレーベルは,この微笑を「共同感情」との関連においてその根拠を求めている。すなわち,最初の微笑は,「単に身体的な自我感情あるいはむしろ自己感情というようなものの中に根ざしているだけでなく,まず母と子の間に成り立ち,次に父と兄弟姉妹との間に,さらに後には兄弟姉妹や一般の人々と子どもとの間に成立する,身体的ではあるが,より高次の共同感情」[6]の中にその根拠がある。しかも,この最初の共同感情は,「高次の精神的結合」すなわち神との完全な合一を求める真の宗教心の最初の萌芽としてきわめて重要な意味をもっている。この時期の子どもは,「自己が,神的なものから,神から生じてきたものである」[7]ことを,「おぼろげな予感」として意識しているにすぎないが,フレーベルは,この予感こそ保護され形成されるべきである,と考える。「このおぼろげな予感こそ,灰白色よりもなおおぼろげなこの意識こそ,早くから人間に育くまれ,後には意識にまで高められ,純化されなければならないもの」[8]なのである。子どもは,まずおぼろげな予感によって世界を把握するが,後には人間の使命として明晰な意識にもたらされることが要請されている。

彼によれば,「万物の使命」は「そのものの本質,したがってそのものの中にある神的なもの,ひいては神的なものそれ自体を,発展させながら表現すること,神を,外なるものにおいて過ぎゆくものを通して告げ顕わすことである。」[9]。すなわち,可視的な世界において,自己独自の本質を実現し完成すること,換言すれば,最も広義の意味での表現がすべての個別的存在の使命なのである。その際自己独自の本質の表現は,同時により包括的な全体的連関の中に組み入れられる。それによって,独自な本質の実現は,同時に神的なものそのものの実現という意味を得てくることになる[10]。人間もまた,万物と共通の使命を有する。つまり,「人間の本質,人間の中にある神的なもの」を実現し完成すること,および「神を顕現すること」である。しかし,人間は,他の事物とは異なる特殊な使命を有している。彼によれば,「認識する存在,理性をもつ存在」としての「人間の特殊な使命」は,「人間の本質を,人間に内在する神的なものを,……十分に意識し,生き生きと認識し,明確に洞察して」,それを「自己の決定と自由とをもって」,自己の生命の中で実現し活動させ顕現することにある[11]。つ

まり，他の事物が無意識的に遂行しているのと異なり，人間は，十全な意識，明確な認識をもって，それゆえに自己決定と自由とをもって自己の本質を実現するという点において，特殊な使命をもつのである。こうして，おぼろげな予感が明確な認識に高められることこそ，フレーベルにとって教育の課題なのである。彼は，「人間の中にある神的なものの，すなわち人間の本質は，教育によって人間の中に展開され，表現され，意識化されるべきである。」(12)と述べている。

## II

ところで，フレーベルは，「人間は誰でも，既に幼時から人類の必然的，本質的な一員として，認識され承認されかつ保育されるべきである。したがって，両親は，保育者として神や子どもや人類に責任を感ずべきであるし，またその責任を認識すべきである。」(13)と述べ，人間を「人類の必然的本質的な一員」として認識し保育すべきこと，とりわけ両親にはその責務があることを指摘している。この点については，乳児保育に際して特に重視される「共同感情」の育成の問題との関連における検討が必要となるであろう。なぜなら，この感情は，子どもと母親との間にまず成立し，次に家族，一般の人々との間に成立し，究極的には「神との完全な合一」へと向うものであるが，時間的な経過にしながって一歩一歩達成されるというのではなく，「最初の微笑」の時点で既に自己の神的本質を「おぼろげな予感」としてではあるが意識していると言われるように，むしろこの「おぼろげな予感」を「明晰に意識」に高めることが発達論として展開されるのであるから，前述の人間の本質が神的なものであって個々人の中には個々の現存性と同時に，それを越えた神的なものそのものが内在しているという彼の見解からして，人間存在そのものの本質規定とその表現形式が明らかにされなければならないからである。

彼は，「親の子として子どもの使命」，「人類の一員としての人間の使命」，「神および自然の子としての人間の使命」について，次のように言及している。「親の子としての子どもの使命が，両親のつまり父と母の父性的なものと母性的なものの，精神的なものと情意的なものの本質……を一致調和させて展開し形成することにあるのと同様に，神および自然の子としての人間の使命は，神と自然の本質を，自然的なものと神的なものを……一致

調和させて表現することにある。」[14]。同様に「家庭の一員としての人間の使命」および「人類の一員としての人間の使命」は，それぞれ「家庭の本質および「人類全体の本質」を調和させ形成し表現することにある。要するに，これら人間に課せられた使命は，それぞれの本質を調和的に表現し形成すべきである，とされる。このように調和的に表現し形成することは，個々人が「最も独自的かつ個性的に自己を形成し表現する」[15]場合に，初めて可能になる。フレーベルは，「人類の一員としておよび神の子として，どんな人間にもそれぞれ人間性の全体が内在している」とし，各人は，この「人間性の全体」を「自発的に，自由に表現して，それを自己自身および他者の模範となすべきである。」という[16]。すなわち，人間性の全体を模範的に体現することが，個々人に課せられた使命なのである。それぞれの人間には，人間性の全体が，およびそれを越えて同時に神の本質が内在するが，それが個々人の中において新たに体現されるべきであるというフレーベルの汎神論的な思想は，彼の個性の捉え方を端的に示している[17]。個々人に内在する人間性の全体は，「全く独自な，個有な，個人的な，それ自身における唯一の仕方」[18]で，各人の中に表現され刻印づけられているのであり，したがって，個々人における「最も独自的かつ個性的に」かつ「唯一の仕方」での自己表現は，同時に人間性の全体および上述の諸々の人間の使命を果していることのみならず，独自な仕方で神的な宇宙を表現している，といえる。

## III

そこで，幼児の生活における一つの基本的な要素である遊戯の検討を通して，子どもは，いかにして世界を獲得し自己の本質を実現していくのか，その場合に子どもの独特な予感の形成はいかなる意味をもつのか，という点を明らかにしたいと思う。

フレーベルは，幼児期の遊戯を「内なるものの自由な表現，すなわち内なるものの必要と要求に基づくところの，内なるものの表現」[19]であると定義付ける。この時期の遊戯の目的は，「活動そのものだけ」であるが，それは，この時期を「活動衝動」に基づき，「活動のための行為」が行なわれる時期であると捉える点にある[20]。彼によれば，個々の人間は，行為によって自己を外へ表現し，それを自らの中に再び取り込む以外には自己を認識

することはできないのである。すなわち，自己を自己自身に対置することによって初めて自己を認識することが可能になる。したがって，前述の人間の使命との関連において，自己の内的本質を実現するためには，行為によって自己を表現し，そのことによって自己を認識する他ない。子どもは，遊戯を通して自己自身の本質の認識を試みており，その際子ども達の行為や営みは，内面的精神的なものを感覚的なもので示すものであること，つまり象徴的なものである[21]，とフレーベルは指摘している。乳児の「最初の微笑」に関する検討においても認められたように，子どもは精神的な子感の形式において世界の深い精神的意味を把握しているし，把握することができるのである。遊戯を通して，子どもは，外界を自己の内部形成の手段として利用することによって外界を獲得するが，他方では，子どもは外界の中に再び精神界を把握するのであって，しかもそれは一緒に遊戯する人間世界一般のみならず，自然界においてもなのである。

遊戯を通して他の人間のみならず，自然を素材として自己を認識し自己の本質を実現することが試みられている，という点は留意すべきであろう。彼によれば，自然は，「神の書物」であり，神の精神は，人間の生命の中においてよりも自然の中にこそ，より純粋により明確に現われている[22]。「神の精神は，自然の中に見えないが見えるものとして現われるのであり，したがって自然は見えないが見える神の国である。」[23]。自然は，神の精神の表現であり，それゆえ人間の生命の象徴である。[24]このような自然の象徴的な見方は，彼の形而上学的確信に基くものである。すなわち万物の中に統一的な神的生命が生きており，かつ万物がこの唯一の神的生命の表現であるとすれば，すべての個々の生命は包括的な全体の表現であり，象徴であって，この全体を目に見える形象において明示することができるわけである[24]。したがって，フレーベルが，「精神や生命は，自分が創造し産出し表現するものすべてに，自己の本質を刻みつけ植え込まなければならないし，自己が表現するすべてのものに……自己の本質を付与しなければならない。精神や生命は，自己が表現するすべてのものに対して，しかも表現されたもののあらゆる部分に自己の印象を押さなければならない。生命や精神を，すなわち存在を，自己の中に担っていないようなものは，……いかなるものも決して現われえないし，このようなもので目に見え知覚できるものはひとつとして生じえないのである。」[25]と述べているように，可視

的に捉えられる自然および外的世界一切は，精神的本質の表現であり，その意味で象徴的である。

ボルノーによれば，予感は，現象的な皮相の背後に隠された深みを感知することができることによって象徴把握と不可分に結びついている。象徴はそれがより深い予感を呼び起こすことができるからこそ，象徴なのである。逆に言えば，予感によってのみ象徴は理解されうる(26)。子どもは，独自の予感の力によって外的世界の中に内的世界を把握している。それは，最初の微笑や遊戯の検討から認めることができる。子どもの生の諸現象は象徴的である，というフレーベルの主張は，『人間の教育』においても貫かれているのである。このような子どもに関する基本的な見解は，彼の形而上学的確信に立脚するが，それが今日においてどれほどの積極的な意味をもつかという点をめぐる考察は，彼の浪漫主義的発想や象徴主義への批判を踏まえた上での検討が必要になろう。

**注**

(1) C. Lück (Hrsg): Friedrich Frobel und die Muhme Schmidt. Ein Briefwechsel, 1929, S. 77.（この論文は筆者の手許にはない。O. F. Bollnow: Die Pädagogik der deutschen Romantik, von Arndt bis Fröbel, Kohlhammer, Stuttgart 1967, S. 201. からの引用による。）

(2) O. F. Bollnow: a. a. O., S. 201.

(3) Das Kleine Kind order die Bedeutsamket des allerersten Kindestuns, 1826. in : E. Hoffmann (Hrsg): F. Fröbel, Ausgewahlte Schriften, Bd. 1, Helmut Küpper, Dusseldorf 1964, S. 81.

(4) ditto, S. 81.

(5) ditto, S. 81.

(6) E. Hoffmann (Hrsg): Friedrich Fröbel, Ausgewahlte Schriften, Bd. 2, Bie Menschenerziehung, Helmut Kupper, Dusseldorf 1968.（以下 ME と略記する）S. 22.

(7) ditto, S. 23.

(8) ditto, S. 23.

(9) ditto, S. 7—8.

(10) Vgl. O. F. Bollnow: a. a. O., S. 125—126.

(11) ME, S. 8.

(12) ditto, S. 9.

(12) ditto, S. 17.

(14) ditto, S. 18—19.
(15) ditto, S. 19.
(16) ditto, S. 18.
(17) Vgl. O. F. Bollnow : a. a. O., S. 144—145.
(18) ME, S. 18.
(19) ditto, S. 36.
(20) ditto, S. 61.
(21) ditto, S. 71.
(22) Vgl. ditto, S. 89—97.
(23) ditto, S. 97.
(24) Vgl. W. Lange : F. Fröbelsgesammelte pädagogische Schriften, Abt. 1, Bd. 1, Biblio Verlag Osnab rück 1966, S. 40. フレーベルはこの箇所で,「自然，わけても植物界，特に樹木の世界は最も高い精神的関係において，人間の生命そのものの鏡であり，否象徴である。」と述べている。
(25) ME, S. 91.
(26) O. F. Bollnow : a. a. O., S. 206.

フレーベルの遊戯論に関する考察は，拙稿「フレーベルの幼児観——遊戯論との関連において——」九州教育学会紀要第2巻，を参照されたい。なお，本論文の作製にあたって，次の訳書を参考にした。

○フレーベル著，荒井武訳「人間の教育」(上)(下)，岩波，1964。
○ボルノー著，岡本英明訳「フレーベルの教育学」，理想社，1973。